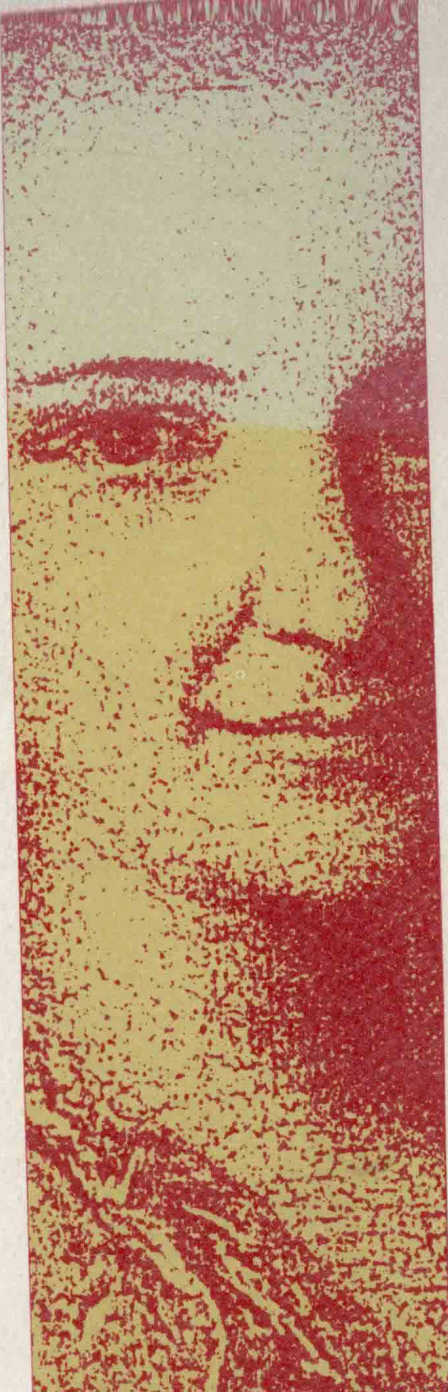


杉山秀子

魔女の系譜

ロシア文学の中の女性像



亜紀書房

魔女の系譜

ロシア文学の中の女性像

杉山秀子

亜紀書房

〈著者略歴〉

杉山 秀子 (すぎやま・ひでこ)

1943年 神奈川県に生まれる

1966年 早稲田大学文学部卒業

現 在 駒澤大学教授

1990年5月15日 第1版第1刷発行

定価 1700円

(本体1650円)

魔女の系譜

著 者 杉山 秀子

発行所 亜紀書房

東京都千代田区神田神保町2-9

電話 03-264-8301 (代)

振替 東京 0-144037

乱丁本、落丁本はおとりかえいたします。

三晃印刷・大洋社製本 ©20

1073-1711-0098

目

次／魔女の系譜――ロシア文学の中の女性像――

ゴリキイ文学の中の女性像

1 マーリヴァとタチャーナの形象をめぐって 3

2 小説『母』におけるペラゲーヤ・ニーロヴナの形象について 21

3 ゴリキイをめぐる女たち 40

トルストイ文学の中の女性像

反逆としての姦通と女の自由 79

ドストエフスキイ文学の中の女性像

娼婦と聖女のはざま 99

チエーホフ文学の中の女性像

1 『三人姉妹』 129

2 『可愛い女』 146

コロンタイ文学の中の女性像

『ヴァシリサ・マルイギナ』について.....	167
------------------------	-----

チンギス・アイトマートフ文学の中の女性像

1 『ジャミリヤー』.....	191
-----------------	-----

2 『処刑台』をめぐって.....	211
-------------------	-----

あとがき.....	229
-----------	-----

ゴ
ー
リ
キ
イ
文
学
の
中
の
女
性
像

1 マーリヴァとタチャーナの形象をめぐる

はじめに

ゴースキイの作品における女性像を検討することは、ゴースキイ自身の女性観の本質を探るうえで極めて興味あることである。それはいうまでもなく単に女性観にのみとどまらず、ゴースキイがどのような世界観をもち、どのように現実に肉薄していったか、ゴースキイ自身の思想や生き方にきいてもきれない密接な関係を有しているからである。私は折にふれて、ゴースキイが創造した一人ひとりの女に光をあてて、その多様な生きざまと彼女たちが生きた時代そのものを考えたいと思っている。

ここでは、まずゴリキイが創造した女たちのうちで私をもっと感銘させた、たくましい、美しい、誇り高い二人の女浮浪人を取りあげ、彼女たちの生き方を探っていきたい。

彷徨と模索

ゴリキイが一連の浮浪人小説の系列に入る『マーリヴァ』を書いたのは一八九七年のことである。それは、ゴリキイが初めてルーシ遍歴の旅に出てから六年後のことであった。この九〇年代の初頭にはロシアでは大飢饉が起こり、農民たちの大量零落化の現象がみられるようになった。また都市では同時に工業が急テンポで発達した。レーニンは九〇年代この農村をおそった大飢饉を『ロシアにおける資本主義の発達』の中で「農民階級の収奪の異常な強化をよび起した一八九一―一八九二年の恐慌」とまで書いている。零落化した農民たちは、パンを求めて、ある時は村をあげて、ある時は隊をつくって、「多くの時間を仕事なしにすごしながら、きょうは地主のところに、あすは鉄道工事請負人に、つぎには都会の雑役人夫あるいは農家の日雇い等としてあえて雇われていかなければならないとき、またこの〈農民〉がロシア中を雇い主をとりかえてまわり、どこへ行くともいたるところで自分をもっとも厚顔無恥な略奪をうけることに遭遇する時、自分とならんで自分と同じような一文なしが略奪されるのを見る」

のである。ゴーリキイは初期創作過程の中で、このように貧民化し、浮浪化した人々に特別な関心を持ち、少なからぬページをかれらにさいいている。『マリーヴァ』の中でも農民が如何に土地を離れ、出稼ぎを余儀なくされるか、その離農の過程が、ヴァシーリイ・ヤーコフ親子の描写の中での確に表現されている。しかしこの親子はたとえ離農し、漁場で一もうけしようがやはり、「土」への憧憬は根絶し難い。息子子のヤーコフは大海原をみると、「これがみんな地面だったらなあ！ 全くみんな黒土だったらどんなにいいか、耕やすんだがなあ」と嘆息まじりに一人言をいう。親父のヴァーシリイは情人だったマリーヴァに肘鉄を喰わされると、一度は捨てた田舎の古女房のもとに戻り、そこでもう一度百姓をやりなおそうと決心する。そもそもこの親子の「土」への帰属意識は根っからの浮浪人であるセリョーシユカの嘲笑の対象になる。セリョーシユカによれば、かれらはいつもあわれっぽい顔をして、ちゃんとゼムストヴォ（地方自治体）がついていて、かれらの後押しをしてくれるのだという。女主人公のマリーヴァはこの親子の中にロシヤの農村に頑迷なまでに根強く巣くっているあの中世的な残酷な封建的後進性を本能的にかぎつけ、親父からも息子の求愛からも逃れようとする。とりわけヴァシーリイのマリーヴァに対する暴力的脅しは、誇らかな強い性格の持主であるマリーヴァには許し難い行為としてうつる。「あたしはお前さんの女房だっていうの？ 何の理由もなく妻をなぐるくせがあるもんだからあたしにもそんなふうにできると思ってたんだろ。ところがそう

はできないさ、あたしはきままな御身分なんだよ、誰も怖い奴なんかいないのさ。」マーリヴァの自由への激しい希求は、ロシアのおくれた農村における女たちの境遇に思いをはせることによって得たなまなましい認識によって益々その敵しさを増大させるばかりである。何処に住んでいる女たちをも普遍化しようとするヴァシーリイの画策にマーリヴァは厳しく抵抗する。「嘘をつくものではないよ。あたしだって田舎では、欲っそうと欲っしまいと嫁にいかねけりゃならないんだ。もし百姓女が嫁にいったとなりゃ、死ぬまで奴隷さ、やれ刈入れた、やれはた織りだ、やれ家畜の世話だ、やれ、子を産めとか……一体自分自身のために何が残るのだらうか。あるのは亭主ののしりと、なぐられることだけさ。——ところがここでは、あたしは誰のものでもないんだよ、かもめみたいに行きたいところに飛んでいくんだ、どんな奴もあたしの邪魔をしないし、どんな奴だって指一本あたしにふれさせないよ。」

マーリヴァの、大空と大海原の空間を一羽のかもめとなって飛翔しようとする自由への希求は、ここではもはや犯すべからざる絶対的なものとして、一つの強靱な意志にまで昇華されたものとして描き出されている。ここには、『ひきまわし』（一八九五年）の中の封建的農村の貧困と無知の犠牲となった瀕死の女や、オクローフ的小市民根性の犠牲となった『退屈まぎれに』（一八九七年）の中の洗濯女アリーナの悲劇は全くみられないのである。彼女は大空を誇らかに飛翔することを知った。もはや決して、「まっ暗で狭苦しい」「ほら穴」の中には戻ることは

できない。たとえ嵐が来ようとも、たとえ疲労の果てに死が待っていようとも高く高く天空をかけめぐることが自己に課せられているのである。ゴークイは、マールヴァをヴァシーリイ親子に対置させることによって、零落したとはいえ、彼等の意識のどこに残っている小所有者の意識にも通ずるようなケチ臭い安穩な生活の鑄型に人間をはめこもうとするロシアの農民の後進性を浮き彫りにしている。そして根っからの浮浪人根性のしみついたセリョーシユカもこの親子に対しては本能的敵意をむき出しにする。しかしながら、だからといって、ゴークイがセリョーシユカを弁護しているということではないのである。セリョーシユカの生き方に対する批判は次のような会話の形ではっきり提示されている。

セリョーシユカ「……おい、俺のところにお興入れはもうすぐだろうな？」

マールヴァ「何をやっていくか、どう生活していくか、まず話して欲しいね、それによってちよつと考えてみるよ。」

セリョーシユカ「別に何もするつもりはねえな、ブラブラするつもりだな。」

マールヴァ「そんなら、どうやってオマンマ食べるのさ。」

セリョーシユカ「お前もおれのおふくろと同じであれこれさきの心配をしている。何をどういうふうにかつて？……そんなことわかるもんかい。さあ、飲みに行くべえ……」

ここでマーリヴァにいきなり指摘されているように「何を？　どのように？」ということこそが九〇年代ゴリキイがとりあげてきた一連の『浮浪人もの』の小説の中の主人公に欠落していたものである。かつてゴリキイは『わが文学修業』（一九二八年）の中で、自分が浮浪人に心をひかれたのは、「乞食じみた小市民的タイプの人々ではなく、異常な人々を描きたいという欲望による」という赤裸々な告白にもあるように、初期の作品である『エメリアン・ピリヤーイ』（一八九三年）、『チエルカッシュ』（一八九五年）、『コノヴァーロフ』（一八九六年）等の中には浮浪人——「引き裂かれた人々」のタイプが生き生きと描き出されている。ゴリキイはこれらの一連の浮浪人の形象を通じてその肯定的側面を描き出すことによって、これらの形象の対極にある小市民的思想を徹底的に告発したかったのである。しかし、『マーリヴァ』における如く、「何を？　どのように？」という明確なる指針がそれぞれの主人公の形象に稀薄であったために、主人公たちがようやくめざめるに至ったその環境に対する抗議も不完全な形のままになり、明確な社会的抗議の色彩を帯びるには至らなかったのである。このような点において、女浮浪人、マーリヴァが生活設計において、何を、どのようにという単純明快な疑問を抱いたことは、マーリヴァ以前の浮浪人像と較べれば一歩前進したといえる。更にゴリキイは女浮浪人マーリヴァの形象を積極的な主人公として描き出すことにより、これまで

の女浮浪人にはかつて見られなかったような、拘束なき絶対的自由への激しい希求、明日を肯定するしたたかな「生」の熱い意欲、己れ自身に対する確固たる自信、封建的残滓に対する激しい憤り、を体现せしめた。確かにこれらの肯定的資質はマリーヴァ以前の浮浪人たちの場合と同様に「みにくく発達した所有の感情、いつも自分の内部と外部の平安に対する張りつめた願望、この平安をとにかくやぶらせる可能性のあるすべてのものを前にしての暗い恐怖心」に満たされた当時の社会の小市民的思想に正に鉄槌を下すことができた点においては、大きな意義が存したといえる。

しかし、先にも触れた如く、問題は、マリーヴァが、「何を？ どのように？」という単純な疑問をふりかざしたままに終り、それに対する解答を何ら発見し得ていない点である。「もしもあたしが、この美貌でもって欲しいと思えば、あたしはいつだって自分に必要な男をつみとちちまうよ」とヴァシーリイに確信ありげに宣言するマリーヴァにも「一人でしんとしていると、むしろ泣きたくなる」とときがある。彼女は「いつも何か欲し」くなる。ところがセリョーシユカの「めったに欲しいものがない」ということは根本的に異なり、「何が欲しいのか」彼女にもわからないのである。「時には船に乗って海へ出て、遠いところへ行つて、これ以上二度と人間をみないようになりたい」と思ったり、「時には、一人残らず人間をぐるぐる廻して、自分のまわりをこまみににめぐらせてみたらなあ」とそれをながめてせせら笑つ

てやったらとも思い」、「ある時には自分自身が可哀相になり、またある時には、人間を残らず殺しちゃって、そのあとで自分も……恐しい死にさまで……」とマリーヴァの思いは段々狂おしいまでに乱れてくる。ここには、何と切々たるマリーヴァの真情が吐露されていることであろうか。恐らくマリーヴァの胸の内には常勝軍的に現状を首肯することのできない、ロシアの生活機構の中に隠然と潜む諸矛盾を敏感に感じとり、現実の生活をつき破って、今までとは全く別の新しい生活機構と人間関係の根本的なあくことなき渴望が無意識的に隠されていたのではなからうか。この潜在的な渴望が、現実的な社会機構と人間の諸関係に対するリアルな批判と結びつき、しかもそれが実現されざる、出口なきものとしてマリーヴァの内に自己認識された時、それは次第に、フナーキスティックな、自暴自棄的な様相さえ帯びて来るのである。そして最終的には「けっきょく人間なんてみんななにか、木っぱみたいなもんさ」という環境社会に対する単なる否定的結論に終始してしまい、この環境に対する全面的否定は、未来に対する何らかの展望と現実に対置し得る生活設計を見出すモメントにはなり得ていないのである。私はここにこそ、他の浮浪人の形象と同様、時代の緊急なる課題に解答を出し得ない「マリーヴァ」の限界があるように思うのである。マリーヴァは物語の結末で、ヤーコフの求愛をしりぞけ、ヴァシーリイのあとをうけついで漁場の見張番になったセリョーシユカのもとになびこうとする。しかしこのことはマリーヴァの抱く疑問への解決には何らならないのである。むしろ

ろ、自我の確立への自由を確保するために、別の男になびき、寄食することにより、マリーヴァの内的矛盾、自己撞着はますます深まり、結論のない、どうどうめぐりの懊悩を彼女にもたらずものではないのであろう。

ゴリキイは、マリーヴァの現実への敗北を予期させながら、一方では自分自身の思想の限界を乗り越えて、マリーヴァの限界をつき破るような形象を真剣に模索していた。マリーヴァの後身とも言われるタチャーナがこの点でマリーヴァの限界をしのぐことができたかどうかを次にみていきたい。

新しい生活創造への道

ゴリキイは初期作品群の創作過程を通じて批判的リアリズムのめつとも良き伝統を発達させながら、同時に時代の新しい要請に真に答え得るリアリズムを模索し続けた。彼は現実に発展しつつある新しい未来への勝利の確信を客観的に把握し得たとき、はじめて、革命的萌芽のきざしある現実にふさわしい新しいリアリズムを創造することができた。その実践の第一作がはかならぬ『母』（一九〇六年）であったことはすでに周知のことである。

『母』が文壇に出るやいなや、Д・В・フィロソフの論文『ゴリキイの終焉』を皮切